

「ペトロとヨハネ、投獄される」

2016年03月03日

使徒言行録4章1節～4節。ペトロとヨハネが民衆に話をしていると、祭司たち、神殿守衛長、サドカイ派の人々が近づいて来た。二人が民衆に教え、イエスに起こった死者の中からの復活を宣べ伝えているので、彼らはいらだち、二人を捕らえて翌日まで牢に入れた。既に日暮れだったからである。しかし、二人の語った言葉を聞いて信じた人は多く、男の数が五千人ほどになった。

ペトロは、生まれながら足の不自由な男に「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と宣言し、右手を取って起こすと、男は立ち上がって歩き出した。民衆は驚き、ペトロに好奇と尊敬の目を注いだ。ペトロは、私たちの力や信心ではなく、復活した主イエスの名によるものだと語った。そして、旧約聖書で預言されていた通り、神がメシアとして遣わした主イエスは苦しみを受け、殺されたが、復活された。私たちは、その復活の証人であると、復活された主イエスについて力強く説教した。

ペトロの説教は神殿当局、殊にサドカイ派の祭司たちには耐え難いことであった。理由は二つある。一つは、ペトロが「あなたがたは、命の導き手である方を殺してしまいました」と語った言葉である。最高法院で大きな権力を持つ祭司長たちが中心になって、主イエスの殺害を目論み、強引に十字架で処刑した。祭司たちは、ペトロのあなた方が主イエスを殺したという言葉聞いて、許しがたいと思った。彼らが主イエスを殺したことに正義を感じていたか、あるいは良心に咎めを持っていたかは分からない。おそらく、双方の思いが交錯していたであろう。いずれにしても、主イエスを殺した責任はあなた方にもあるというペトロの言葉に怒りを持ったことは確かである。

もう一つ、許せないことはペトロの復活証言である。当時の民衆を支配していた宗教勢力はファリサイ派とサドカイ派であった。ファリサイ派は紀元前2世紀頃から起こった宗派で、旧約聖書の律法を学び、民衆に律法を遵守する宗教生活をするように勧め、教えていた。彼らは、シリアによる残酷な迫害を経験したことだから、目に見えない天使の存在を信じ、復活も信じる教義に立っていた。

一方のサドカイ派はエルサレム神殿の祭儀を司る宗教に関わる宗派であった。彼らは、ローマ帝国の属国である現状を認め、体制を維持、肯定する保守派の貴族階級であった。現実容認の立場は天使を架空とし、復活などあり得ないという教義に立っていた。ペトロの主イエスが復活したという説教は、自分たちの教義に反すると怒り、何としても二人を、抑え込まなければならないと思った。使徒言行録4章1節～3節bに「祭司たち、神殿守衛長、サドカイ派の人々が近づいて来た。二人が民衆に教え、イエスに起こった死者の中からの復活を宣べ伝えているので、彼らはいらだち、二人を捕らえて翌日まで牢に入れた」と、サドカイ派の人々の動揺を伝えている。二人の説教を聞いて信じた人が男だけで五千人もいたことを知り、民衆が自分たちから離れて行くと焦っただろう。

いつの世でも、権力者たちは自分の意にそぐわない者は強権を持って排除、抹殺する。人を救うことを使命とする宗教においても、そうである。宗教の本意は、神だけを絶対とし、地上のものは全てあるがままの相対的なものと見なし、主張や教義は違っていても、自分と同じ人間として受け入れ合うことである。